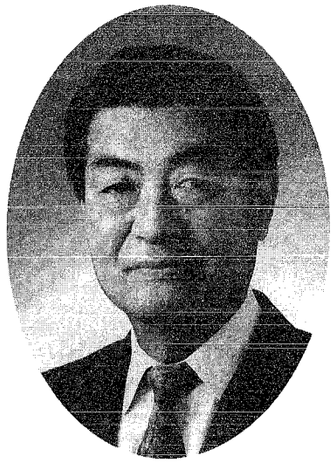
年頭のご挨拶



小須戸町長　佐藤　大加志

新年おめでとうございます。

西暦二〇〇一年、新世紀の幕開けを迎え、特別な緊張感の中で、心新たに町民の皆様にご挨拶を申し上げます。

激動、激変、そして発展と、大きな変革の時期、時代を経てきた二十世紀を後にした今日、二十一世紀にかける期待感と不安感が微妙に交錯してまいります。地球社会全体の平和と安全福祉の増進、そして生活の安定と向上は人間等しく基本的な願いであります。

また、一方では、大自然や自然環境の保全、浄化対策は、全人類の健全なる繁栄の為に欠かせない大きなテーマであります、これらの願いや問題解決の為には、人間ひとり一人の心構えと努力が更に求められていく世紀となることでありましょう。

そして過ぎし一世紀を振り返りながら、同じ過ちを繰りかえすことのないように、新たな自覚をもつとともに、新たな希望をもって二十一世紀を進むことが大切であると思っております。

さて、小須戸町では、昨年十一月九日に町制施行百十周年の記念式典を挙行いたしました。その式典の中で、当町が今日このように、まことに住み良い、平安な町と地域になっていることについて、先人各位の並々ならぬご苦労とご努力に対して深甚なる敬意と感謝の意を表した次第であります。

これからの二十一世紀では生活環境の変化はもとより、市町村合併等による行政的環境の変遷も想定されるところでありますが、小須戸町は今日の素晴らしい生活環境を大切にしながら発展、向上を目指すとともに、町民皆様の温かい心が結び合った、真に住み良い、誇りのもてる小須戸町でありつづけたいと願うものであります。

先の式典の中で行われました「まごころの町」宣言は小須戸町民のこの「まごころ」を二十一世紀においても反映しつつ、更に明るい地域や社会作りの推進を誓いといたしました。

期待の二十一世紀の幕開けではありますが、依然と政治的・経済的の面で安定感や進展度は乏しく、一方では社会的モラルの低下や学校教育の問題がクローズアップされている現況であります。二十一世紀初盤での課題は重くその対策は急がねばならないと思います。

さて私は、平成三年二月に町長に就任させて頂き、この二月には満十年を迎えることになりますが、この間町民皆様の温かいご理解とご協力を賜り深く感謝申し上げますとともにこれからは行政的にも大きな変革が予測される二十一世紀を踏まえて将来に向った小須戸町をしっかりと位置づけてまいりたいと思っております。

〝明るく生き生きとした町、きめ細やかな福祉のある町〟づくりの基本理念に立ち、今後とも初心を忘れずに真摯な気持ちで、公正・公平・清潔をモットーとして、職員共々一丸となって、新世紀に於ける小須戸町発展の為に最大の努力をしてまいる所存でありますので、町民皆様の一層のご指導、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

終わりになりますが本年の無事故、無災害と皆様のご健勝、ご多幸を心からご祈念申し上げ年頭のご挨拶といたします。

尚、町政の現況報告、主なる事業等につきましては、後発の広報でお知らせしてまいる予定でありますので、よろしくお願い申し上げます。

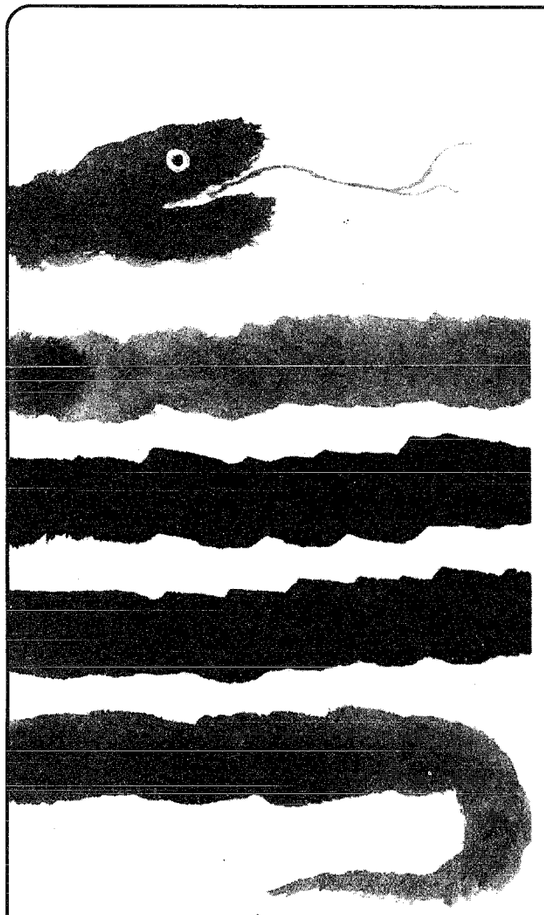
町制施行百十周年記念　まごころの町宣言

まごころのまち小須戸町

一、爽やかにまごころこめたあいさつで
一、まごころで人との出会いを大切に
一、寛容の温かい心をもち合って
一、にこやかにまごころこめて支えあい

平成十二年十一月九日
小須戸町

今年は巳年



約二千七百種も生息

蛇は爬虫類（はちゅう）へビ亜目の動物で、トカゲと同じ祖先をもつといわれています。

体は細長く、四肢はありません。細い舌の先端は二またに分かれていてよく動きます。こんな異様な外見から、蛇を嫌う人が多いようです。

蛇は温帯、熱帯、亜熱帯に多く生息し、アラスカ、シベリアなど寒い地方にもいます。全世界に約二千七百種もいるといわれています。

蛇は悪者？　神？

日本の神話に登場する蛇はヤマタノオロチ（八岐大蛇）といって、頭が八つ尾が八つ、体の長さは八つの谷を越えるほどだったといいます。そのオロチが娘を食いにきて、スサノオノミコトという神に退治されたという話です。

一方、蛇は神格化され、聖書や神話にもしばしば登場します。また、水の神として信仰されたり、家の守り神として家に住みつくのを喜んだりする例もあります。

このように、蛇は悪者として恐れられてもいますが、神としてあがめられることもあり、いろいろな話が世界各地に伝わっています。

また、毒蛇が恐れられ、嫌われるのはもちろんですが、それを薬用に使う例もあり、強壮剤としても珍重されています。

蛇の絵に足を書きたす

蛇は、古くから人間とかかわりが多い動物だけに、蛇に関する故事やことわざもいろいろあります。

「蛇足（だそく）」。これはよく知られている言葉で日常会話にも使われていますが、こんな由来があります。

昔、楚（そ）の国の役人が、蛇の絵を一番早く書いた者が酒を飲むことができるという競争をしました。一人がいち早く完成したのにもかかわらず、時間に余裕があったので足を書きたしてしまい、負けてしまったという話です。

そのことから、あっても意味のないもの、余計なことという意味に使われています。

「蛇（じゃ）の道はへび」も、よく聞くことわざです。「じゃ」といい「へび」といっても、呼び方が違うだけで同じもの。同じ仲間のやったことならすぐに分かるという意味です。

「藪蛇（やぶへび）」「藪をつついて蛇を出す」。しなくてもよいことをして、かえってよくない結果になることです。

心豊かに暮らせる年に

「蛇穴（へびあな）を出（い）づ」という言葉もあります。冬眠していた蛇が、春暖になって地上に出てくることをいいます。

二十一世紀の始まりの今年は巳（み）年。低迷していた景気から脱出して春を迎え、みんなが安心して心豊かに暮らせる年にしたいものです。